六　うどん竜の出現

その頃、お腹の中では。
「王子。うどんが流れてきました」
「出汁も一緒です」
「よし。固体班はうどんを粉々にしろ。リキッド班は出汁を吸収しろ」
「アイアイサー」一同が元気よく答える。大王に代わって、王子が消化活動の指揮を執る。固体班はスコップやツルハシを持ち、リキッド班
はホースを持って、うどんに向かって行く。
「かかれ」班長の号令と共に、隊員たちがうどんを切り刻もうとした瞬間、何かに跳ね飛ばされる。
「ひゃあ」隊員たちは体ごとお腹の壁に叩きつけられた。
「折角、こうして長いまま流れてきたんだ。お前らに切り刻まれてたまるか」
目の前には一本のうどんが立ち上がっていた。異変を感じた王子が駆けつける。
「おまえは誰だ」
「俺か。俺はうどん竜だ。久しぶりに竜になれたんだ。お前らに切り刻まれてたまるもんか。少し暴れさせてもらうぞ」うどん竜は尻尾（？）を思い切り振った。
「わーああ」隊員たちが次々となぎ倒されていく。
「負けるものか」固体班の隊員たちがノコギリを持って、うどん竜の体に刃を押し当てる。
ゴリゴリ。ゴリゴリ。だが、うどん竜の体は傷つかず、反対にノコギリの歯だけが削られていく。
「はっはっはっはっ。どうだ、俺の体は。普通のうどんとは違うぞ。コシが違うだろう。全身が筋肉で硬化しているんだ」
うどん竜が自慢そうに高笑いをする。
「どすこい。どすこい」うどん竜が相撲取りのようにシコを踏む。その振動で、王子たちは全員地面？にひっくり返る。尻もちをついたり、寝そべったりして、起き上がることができない。
「なんとしても、消化するんだ」
王子を先頭に、全員が一斉にうどん竜に飛び掛かる。
「俺を消化できるのか」
うどん竜が体をくねらせる。鞭のような動きだ。
「わー」その体に当たって、王子をはじめ、隊員たちはまたしても跳ね飛ばされた。
「まだまだだ」うどん竜が回転し始めた。風が巻き起こり、小さな渦が大きな渦となる。竜巻だ。
「みんな。伏せろ」王子が叫んだ。だが、その言葉よりも先に、隊員たちの多ほとんどが壁に体を打ち付けて気を失った。王子も風の勢いが強くて、立ち上がれない。とてもじゃないが、うどん竜には一歩たりとも近づけそうにない。反対に、体は寝そべったまま、じわじわと後退していく。

「何だか、おかしいなあ」僕はお腹を触った。
「どうかしたか」大王が顔を上げた。
「ううん。大丈夫だよ」僕は無理やり笑顔を作る。でも、お腹の中が何だか変だ。何かが暴れている気がする。まさか。少し、食べ過ぎたのかも知れない。
「そうか」大王はいぶかそうな顔で、僕の体の様子をじっと見つめる。

「どうだ。お前たちは、これでも俺を消化できるのか」
　回転を止めたうどん竜が勝ち誇ったように胸を張る。
「王子。どうしましょうか」
　固体班の隊長とリキッド班の隊長が這いずりながら王子の下に来た。
「うーん」寝転んだまま腕を組んで唸るしかない王子。
「大王に助けを求めましょう」
「だけど、大王は外の世界だよ。どうやって連絡するんだ」
「主がトイレに行けば、私たちが外の世界に行って、大王と話をすることができます」
「主が上手い具合にトイレに行くかなあ」
「トイレに行くように仕向けましょう」
「どうやって」
「こうです」
　固体班とリキッド班の隊員たちは、スコップやツルハシ、シャベル、果てまた、自分の手足で、お腹の至る所を叩き始めた。
「うわはっはっはっは。俺にかなわなくて、とうとう自分の体を傷つけ始めたのか。あきれた奴らだ」うどん竜の笑い声だけがお腹の中でこだまする。